

巻頭言

*

道



米元康蔵

先日、ふらりと立ち寄った書店で海外のことわざを紹介する書籍を目にし、何気なく購入した。その中に、こんな一節が紹介されていた。『やり方はいくらでもある』、おばあちゃんは猫でテーブルを拭きながら言った。『意外なところに道はある。解決策は決して一つではない』というような意味をもつ。その根底には、困難な状況の中でも粘り強く勇ましく生きていこうとするフィンランド人特有の精神 *sisu* (シス) があるという。何故か、印象に残る一節であった。

気づくと、私も古希を迎えて紛うことなき高齢者になっていた。個人的なことで誠に恐縮だが振り返ってみると、放課後の図書室の片隅で世界の伝記物や偉人伝を好んで読み、感動していた小学4、5年生の頃に、商家の跡継ぎとして生まれはしたものの家業を継ぐをよしとせず、医者道を歩みたいと考えるようになった。医学部卒業後は先ず皮膚科専攻としたものの、不埒にも5～6年間ほどの修行後には別の科に移り、一人前の医師となって海外で活躍することを夢見た。しかし、皮膚科学の世界に入り込んでみるとその奥深さやおもしろさ、そして解明されていないことばかりの状況への苛立ちなどにも包み込まれ、そのままそこに浸かって生きるのが当然と考えるに至った。恩師の西山茂夫教授には、憧れでもあった米国での留学研究生活の機会も早々に与えて頂いた。その研究生活を続けている中で、やはり自分は臨床の場できちんと結果の出せる医師になるべし、という確かな人生目標を得た記憶がある。気づけば大学関連には23年間も身を置くこととなったが、私自身を充実させる上で不可欠な多くの他分野の知識を学ぶ重要な時間ともなった。そして、朝から晩まで診療生活に身を置くべく、田舎町であった海老名市をその地と決めて開業。日常外来診療だけに飽き足らず、往診業務や医師会仕事も快く

引き受けつつ21年間余り、患者さん達とは実に密なお付き合いをさせて頂いた。そして、多くのことを学ばせて頂いた。だが無念にも、自負していたはずの気合いと体との繋がりが空回りする状態も生じるようになり、思い悩む日が再三訪れた。既に2年余り前となるが、幸いにも後輩の齊藤典充・和美夫妻がその診療所のバトンを引き継いでくれることとなり、救われた。半年間ほど私なりのリハビリ生活を送ることによってかなり復調でき、今はまた県内外を問うことなく診療生活をさせてもらっている。

新型コロナ禍に陥ったこの3年間、通常の皮膚科診療だけ行っていればよいというわけにもいかず、またその対策に関しては医師会役員という立場からもでき得る限りの協力・参加が必要となった。ワクチンの集団接種事業への当初からの参加は勿論、人員不足の自宅療養者サポート神奈川モデル事業のメンバーにも加わってきた。通常診療で得られる経験・感動とは別に、この時代であるが故の体験・学習も私にはきっと大きな財産となっていることだろう。

さて、この十数年で皮膚科分野における免疫学的療法にはめざましいものがあり、所謂 *life changing medicine* としてその恩恵は大きい。この領域でも、更に皮膚科医は重要な舵取り役の務めを担っていかなければならぬはずだ。他科の医師ではできない継続的且つ適切な外用療法の併用やその指導など、重大不可欠な要素を強調し続ける必要もあるだろう。斯様な時代に、皮膚科を愛し鍛錬を怠らない神皮メンバーの皆さんの仲間として、どうぞ私ももう暫くの間ご一緒させてください。

武者小路実篤を特に愛する者ではないが、既に言い古されたであろうこの言葉を私は今も大切にしている。

『この道より我を生かす道なし。この道を歩く』

(なごみ皮ふ科)